

西隆寺旧境内の調査

—第344次

1 はじめに

本調査は、駐車場建設にともなう事前調査として実施した。ここは西隆寺の中心伽藍の一角、西回廊から金堂にかけての地区で、2000年調査の第324次調査の北側に位置する。324次調査によって、既に西回廊についての詳細は知られているが、金堂との間については調査がおこなわれておらず、回廊で囲まれた伽藍内の状況を検討する必要があると考えた。このため、本調査では西隆寺金堂西側—西回廊間の様相を明らかにすることを目的とし、西回廊の東雨落溝より東側に東西15m、南北8mの調査区を設定した。調査面積は120㎡である。

基本層序は現代盛土、水田耕作土、灰色粘土、灰褐色土、明赤褐色土、赤褐色土、黄褐色粘土、灰色砂の順で、灰褐色土からは中世の土器、陶磁器片が出土した。灰色粘土までを重機による掘削で除去し、遺構確認は灰褐色土、明赤褐色土、赤褐色土上面の3度にわたりおこなった。奈良時代前半の遺構が確認できた東半部については黄褐色粘土上においても遺構確認をおこなった。遺構確認面の標高は71.8~71.6mである。

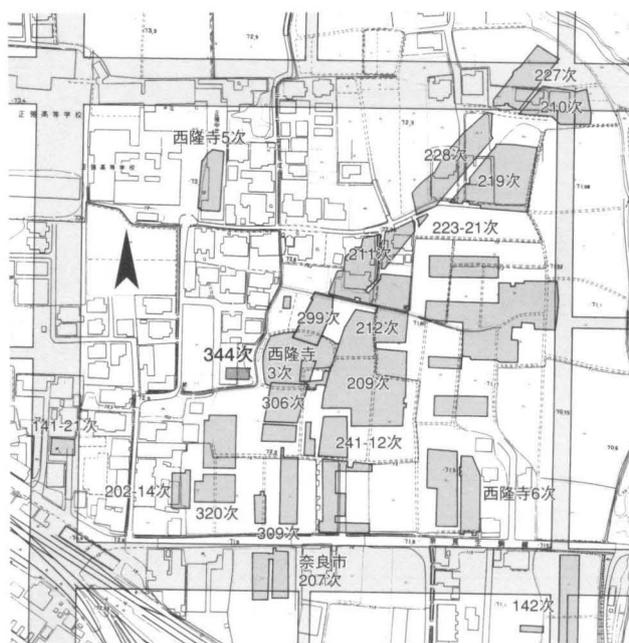


図176 第344次調査区位置図

2 検出遺構

西隆寺以前の遺構

南北建物SB950 西隆寺の整地土である明赤褐色土下の赤褐色土上で確認した。赤褐色土は奈良時代半ばの遺物を含み、この時期に整地されたものと考えられる。また、西回廊基壇下・東雨落溝瓦堆積除去後にも対応する柱穴を確認することができた。

一辺2.5m~2.7mの大型の柱穴をもち、東側、及び南側に方向を揃えて布掘があり、東・南に廂をもつ建物と考える。妻側柱列の間隔は10尺である。残存している柱穴はいずれも浅く、礎石建物の可能性が高い。身舎東南隅の柱穴からは土器が出土した。また、柱穴抜取からは瓦が大量に出土した。この中には西隆寺創建時の軒平瓦が出土しており、西隆寺造営期に廃絶したと考えることができる。また、この柱穴は後述する井戸SE960と重複関係があり、井戸出土土器を参考にするこの建物の使用期間が短期であったことがわかる。

井戸SE960 黄褐色粘土上で確認。南北建物SB950の柱穴と重複関係がある。調査区南側の排水溝では確認できず、掘形の範囲は調査区内部に収まる。井戸枠は土圧で崩落しており、詳細は不明であるが、縦板組みのものと考えられる。断面部分のみを調査するに留まり、全容は明らかに出来なかったが、奈良時代中頃の土器・瓦が多数出土した。

西隆寺の遺構

西回廊SC920 調査区西側で幅約2.8m分を確認した。確認は明赤褐色土上。整地土上に黄色土と灰色土で構築され、基壇最下部のみを残す。掘り込み等の地業はもたない。調査区では東半部を確認した。礎石掘付および抜取を南側で1基確認できたが、北側は遺存状況が悪く確認できなかった。南側の調査区と同じく、瓦積基壇の痕跡を残している。1、2段の瓦積部分が残存しており、瓦の凸面を上、南北方向に長辺を向けて並べている。この瓦の用い方は小口部分を揃える南側の調査区とは様相を異にする。

東雨落溝SD922 回廊の東雨落溝である。幅約1.2m。確認は明赤褐色土上。回廊側の肩は瓦積基壇痕跡から明瞭である。溝内より多量の瓦が出土しており、西隆寺の廃絶とかわりがある。東側の肩は不明瞭であるが、断面の観察から瓦堆積の範囲と一致するものと考えられる。



图177 第344次調査遺構平面図 1:80

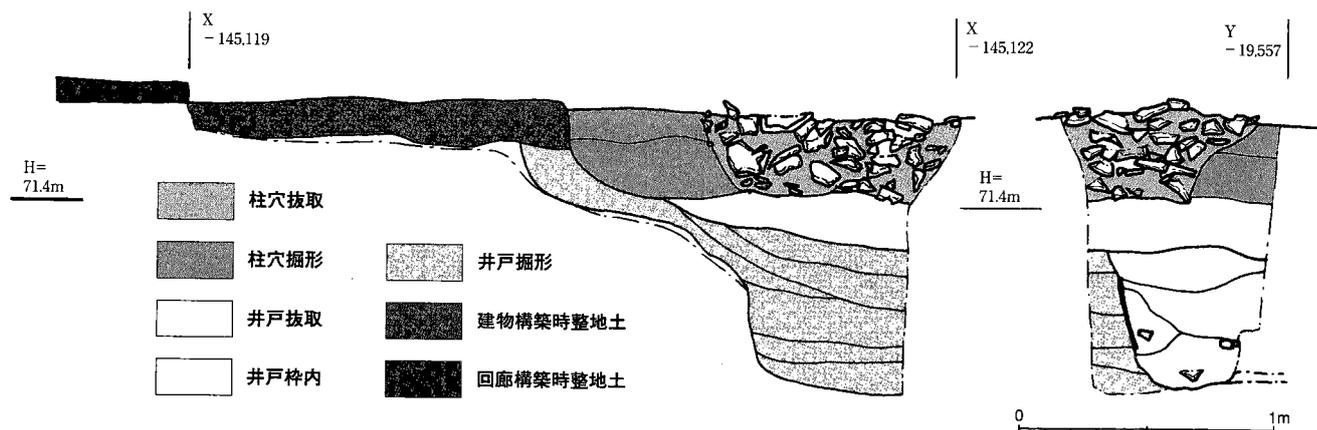


図178 SB950・SE960土層断面図 1:30

3 出土遺物

金属製品、木製品、土器、瓦等が出土した。

金属製品 SD922より、鉄釘が3点出土した。いずれも瓦堆積中より出土しており、回廊に用いられていたものと考えられる。

土器 調査区内では土器・陶磁器・土製品が出土した。井戸および柱穴出土の資料について概要を報告する。

SE960出土土器 井戸構築時(1~4)、井戸枠内出土(5~10)、井戸枠抜取穴出土(11~13)の資料がある。

1は須恵器杯B。青灰色を呈する。底部はヘラ切り後ナデをおこない、高台をつける。高台は外方に屈曲し、外接する。I群土器。2は須恵器椀A。青灰色を呈する。銅鉢の形状を模倣したものである。口縁部は面取りをおこない、外面は丁寧なミガキを施す。3・4は須恵器壺。3は灰色を呈する。頸部と口縁部内面の一部に降灰する。口縁端部は上方に屈曲する。4は灰白色を呈する。

5は土師器蓋。橙褐色を呈する。外面はナデの後、つまみを囲むように4方向の静止ミガキを施す。6は土師器鉢A。明灰褐色を呈する。外面の胴部中位以下をヘラケズリし、内面はナデをおこなう。7は須恵器杯A。灰白色を呈する。口縁部外面に重ね焼きの痕跡が残る。8・9は須恵器杯B。8は灰色を呈する。9は灰白色を呈する。銅鉢の形状を模倣したものである。硯として使用されており、高台内に墨の付着と研磨がみられる。10は須恵器甕。青灰色を呈する。胴部外面に降灰がみられる。

11は土師器杯C。橙褐色を呈する。A0手法で、1段の斜放射暗文、見込み部分に螺旋暗文を施す。12は須恵器壺。暗灰色を呈する。平瓶の可能性もある。13は須恵器壺K。灰白色を呈する。胴部は完形で内面は観察することが出来ないが、外面の痕跡から三段構成と考える。

これらの資料はいずれも平城Ⅲの時期の資料と考えられ、井戸の使用が短期間であったことがわかる。

SB950出土土器 14は土師器杯A。明褐色を呈する。内外面共に器面の剥落が激しく、調整は不明であるが、暗文はないと考える。15は土師器皿A。褐色を呈する。c0手法である。16は須恵器杯A。灰色を呈する。口縁部外面に重ね焼きの痕跡が残る。17・18は須恵器B。17は青灰色を呈する。I群土器。18は灰色を呈する。19は鉢A。外面は黒灰色、内面は青灰色である。外面は丁寧なミガキを施す。20は蓋。灰色を呈する。小型で壺の蓋と考える。

瓦 SD922およびSB950抜取から多量に出土した。

SD922からは、回廊屋根、及び瓦積基壇に使用されたとと思われる瓦が大量に出土した。また、道具瓦として切戻斗瓦、面土瓦、隅切丸・平瓦が出土している。

SD950抜取からは、6236F、6643B、6761Aが出土している。中でも6236F、6761Aは西隆寺所用瓦と考えられている。既往の調査成果からは6236Fは東面回廊や塔地区に多いことが指摘されており(『西隆寺発掘調査報告書』奈文研 1993)、西面回廊でも出土量が多い(『紀要2001』)。6236Fは宝亀年間に製作されたと考えられており、SB950の解体および回廊の整備を考える上で鍵となる資料である。

表23 第344次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			
型式	種	点数	型式	種	点数	
6235	C	1	6643	B	1	
6236	F	5	6761	A	2	
	?	1	6764	A	1	
	型式不明	4				
	軒丸瓦計	11	軒平瓦計		4	
	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩		
重量	111.1kg	442.36kg	0.1kg	3.1kg		
点数	1146	5318	1	7		
道具瓦	斗瓦	2点	面戸瓦	1点	隅切瓦	2点

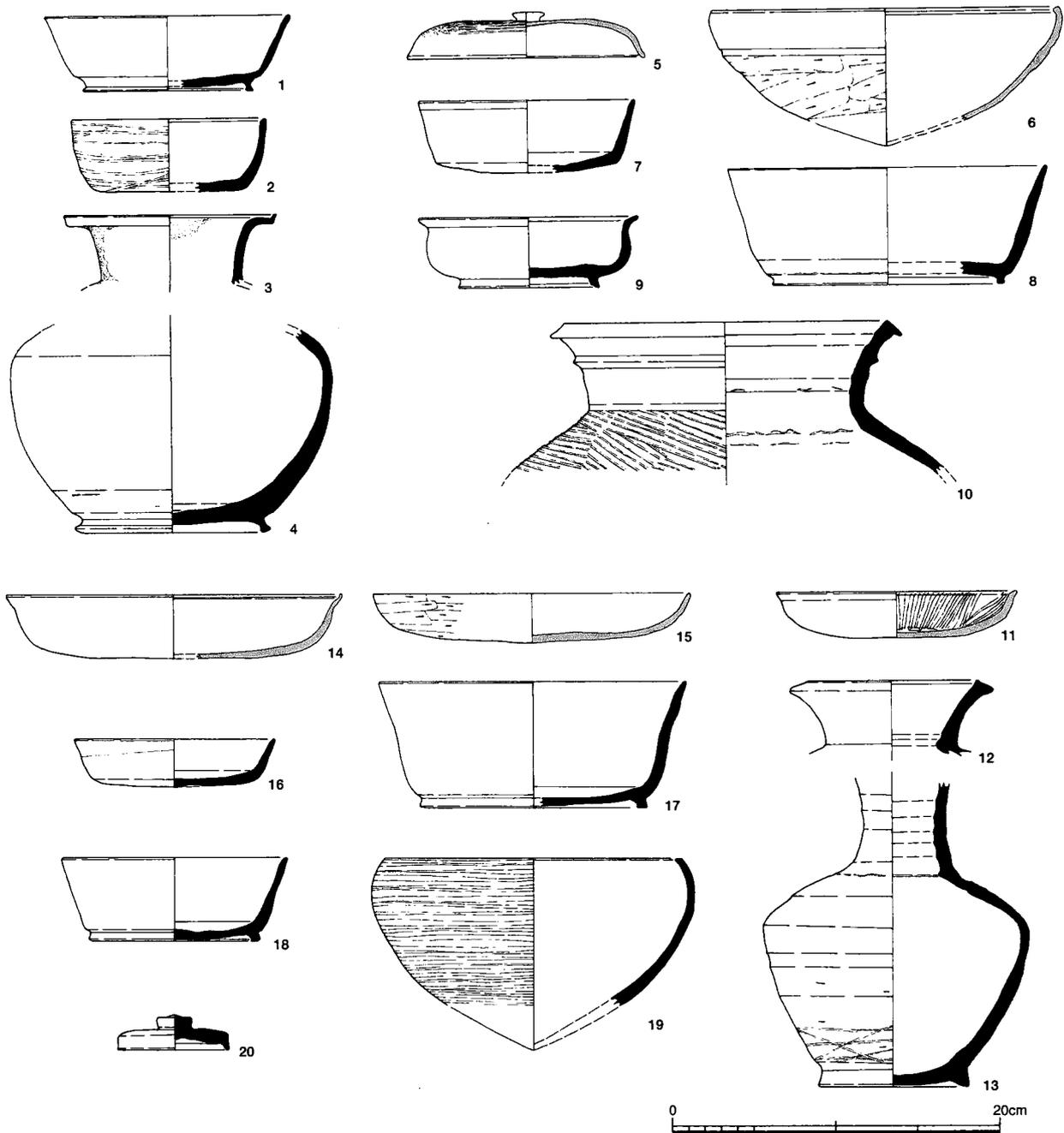


図179 第344次調査出土土器 1:4

4 調査の成果

今回の調査により、西隆寺金堂西側の様相を検討することができた。既往の調査（西隆寺3次・第306次）により、金堂と回廊の間には、瓦や礫が敷かれていたと考えられるが、本調査区内では確認できず、削平により破壊されたと思われる。

また、南側の既調査と同様、回廊は瓦積基壇と考えられるが、瓦を積む方向などに違いが見られる。

従来想定されてきた当地域の土地利用は、奈良時代前半の宅地から奈良時代後半の西隆寺への変遷であったが、西隆寺直前の段階に大型の建物によって構成される施設が存在する可能性があることが指摘できる。この建

物は奈良時代中頃に構築、使用されている井戸に後続し、西隆寺回廊造営時の整地土下より確認され、抜取に西隆寺所用瓦と考えられる瓦を含むことから、回廊の整備にともない解体されたものと考えられ、短期間存在したものである。

建物の解体に伴って出土した瓦の製作年代は宝亀年間（770～）と考えられ、瓦積による回廊の整備が神護景雲元年（767）の西隆寺造営開始後、時間差をもって進行した可能性が高い。

本調査区周辺地域は駅前にあたり、近年開発の進行が著しい地域である。未調査の中心伽藍西北部分を含め、西隆寺の様相を明らかにするために今後とも慎重な検討を進めていく必要がある。（金田明大）